

子どもにつながる保護者支援（事例編）

本リーフレットでは、不登校、不登校傾向にある子どもを支援するために保護者との連携を大切にすることを基本として、連携が取れるケースにしていくための保護者への支援について事例を通して考えます。

また、学校は保護者との連携を取りながら、必要に応じてSC（スクールカウンセラー）、SSW（スクールソーシャルワーカー）、他校種等と連携を取っていくことも大切になります。

【もくじ】

- 《事例1》保護者の焦りからくる不安を理解して支援した事例
- 《事例2》保護者が感じているプレッシャーに気づき支援した事例
- 《事例3》生徒や保護者の傷つきに配慮して支援した事例
- 《事例4》学校に遠慮する保護者の気持ちを支援した事例



《事例1》保護者の焦りからくる不安を理解して支援した事例

学校の状況把握

生徒は入学後数日で欠席がちになり、その後不登校となった。保護者は学校への欠席連絡を毎日行い、担任はSCにも相談しながら家庭をサポートしようとしていた。しかし、不登校の状態が続く不安が大きくなった保護者は、担任に、このままでよいのだろうかかと相談をした。担任は、学校での支援体制は整っていると考えていたため、保護者に「焦らずに、どんと構えて見守りましょう」と提案をした。

保護者の様子

「分かりました」と言うが複雑な表情になった。

知ろうとして聴く

担任：「でも、保護者の方としてはご心配ですね。」
 「ご家庭でのお子さんの様子はいかがでしょうか？」
 「今、どういうことがご心配ですか？」

聴いて気持ちを知る

保護者：「どんと構えておけばよいと言われても、どうしたらよいのか…。様子を見るだけで大丈夫なんですか？」
 担任：「そんな風に思っているらっしゃったんですね。」
 保護者：「最近の様子を見ていると、どんどんひきこもっていきそうで…。」
 「私一人が頑張っているので限界を感じているんです。」

理解する

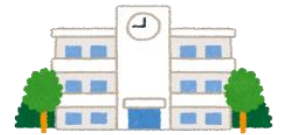
保護者がこれまで一人で抱えてきたこと、子どもの今後についての不安が非常に高いことなどを理解することができた。

声のトーンや表情はどうでしたか？

ここで終わってしまうとすれ違いが起こります!!

保護者が話している時の表情や声のトーンに注意して、表出した言葉と一致しているか等の視点を持ちながら話すことが大切です。

保護者の困りごとを知ろうとして初めて語ってくれることがあります。



孤立感を和らげる声かけや具体的な手立ての提案、保護者と一緒に話し合いながら子どもへの支援を共に考えていく機会を作るなどができることを伝えます。
 ※ 目標の設定などは、校内での会議やSCとの連携などで話し合った上で伝えると、丁寧で良いでしょう。

保護者の気持ちを理解していく

支援する

担任：「見守ると言っても、放っておくという意味ではないんです。学校は支援体制を整えているのでお子さんの小さな変化を見逃さず対応したいと思っています。これからもお子さんの様子を聞かせてもらいながら一緒に考えていきましょう。何でも話してくださいね。」
 「学校にはSCもいて誰でも相談することができます。いろいろなサポート方法があります。一緒に話し合いながらお子さんにとって良い方法を考えていきましょう。」

話し合いの過程で、保護者からは家で子どもにつらく当たってしまうことがあることや、子どもがそれを避けるために部屋から出てこなくなってきたことなども語られたが、担任が保護者を支えたことで、保護者に気持ちの余裕が生まれ、子どもに対してもゆとりのある声かけができるようになっていった。

【支援のポイント】保護者に安心してもらおうとして言った言葉でも、より不安が高まる保護者もいます。担任が保護者の不安に気づき、十分に話を聴きながら一緒に考えていくことで、保護者は安心して子どもに対応できるようになります。

《事例2》保護者が感じているプレッシャーに気付き支援した事例

学校の状況把握

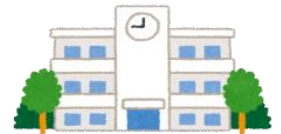
入学直後から休みがちだった生徒が、一週間連続で欠席が続いた。担任は今が大事だと考え、頻繁に保護者と連絡を取りながら連携していこうと考えた。しかしある日、保護者から「登校できそうな時にこちらから連絡するのはだめですか」と言われた。

声のトーンはどうでしたか？

ここで終わってしまうとすれ違いが起こります!!

「電話が負担だ」という感情を持つこともあるというスタンスで気持ちを聴き始めることで、正直な思いを語られることがあります。

保護者をとりまく環境が影響し、学校との連携が負担に感じられることもあります。



- 家庭内でのプレッシャー等による疲れに寄り添い、労います。
- 毎日の連絡が負担であれば、どんなタイミングで連絡を取り合うかなど、決め事をしておきます。
- 一人で頑張りすぎないように、保護者の負担軽減を図ります。

保護者の様子

電話の向こうで何かを言いよどみ、困ったような様子が感じられた。

知ろうとして聴く

担任：「そのようにした方がよろしいですか？」
「お忙しいですし、学校からの電話も負担でしたでしょうか？」

聴いて気持ちを知る

保護者：「学校がこんなにしてくれているのに、どうして頑張れないのかとイライラしてしまうんです。」
担任：「そうでしたか。毎日、お電話をしていただくことは大変なことだったんですね。」
保護者：「先生方に申し訳なくて、欠席連絡をすることすらつらいんです。」
「家庭の中でも、祖父母から子どもを甘やかしていると責められつらいんです。」
「学校から電話をもらっても、よい報告ができないことが負担で電話に出られないこともあるんです。」

理解する

周囲が支援しているにも関わらず登校させることができないのは、自分に原因があると責任を感じている。家族にも責められ、誰にも頼れず一人で抱え込んでいるようだ。

保護者の気持ちを理解していく

支援する

担任：「毎日ご連絡をいただくことは大変なことと分かりましたので、気になることがあればいつでも連絡していただくことにして、学校からの連絡は少し減らしましょうか？」
「私の方は、今後もお子さんと関係を作って話ができるようにしていきたいと思っています。」

話を聴く中で、良かれと思い行っていたことが生徒や保護者の負担になっていることが分かった。いつでも連携を取る体制であることを保護者に伝えたうえでよい距離感を取ることで、より適切な連絡体制が取れるようになり、子どもの必要な情報を共有できるようになった。

【支援のポイント】保護者自身の気持ちがつらくなってくると、一見、協力的ではないように見えることがあるかもしれません。保護者との連絡の取り方について相談しながら一緒に考えることや、学校以外で気持ちを話せる相手がいるか等の確認をしていくことも大切です。また、保護者の気持ちに寄り添うだけでなく、保護者の置かれている状況（例：家族関係）の理解も必要です。

《事例3》生徒や保護者の傷つきに配慮して支援した事例

学校の状況把握

生徒はクラブ活動内でのトラブルから休みがちになっていた。しかし生徒が顧問に相談をしていることを知っていた担任は、顧問と連携を取り状況を聞きながら見守っていた。顧問からは、クラブ活動内で話し合いを行いトラブルは解決したと報告を受けたが、生徒は登校しなくなってしまう。担任が保護者に電話で様子を聞いたところ、「家でふさぎ込んでいるんです」と言った。

声のトーンはどうでしたか？

ここで終わってしまうとすれ違いが起こります!!

保護者の様子

電話の音が硬く感じられた。

知ろうとして聴く

担任：「ふさぎ込んでいるというのは心配ですね。」
「顧問からは、ひとまず解決したと聞いていますが、お子さんはお家でどのようにお話しされていますか？」

学校の認識と本人・保護者の気持ちとの間にズレがあることに気付くことが大切です。
当事者がどう感じ、状況をどう理解しているのかを聴き、捉え方の違いを知ることが必要です。

聴いて気持ちを知る

保護者：「話し合いで一応仲直りしたけど、結局、自分が悪いみたいになったと子どもが言っているんです。」
「顧問の先生は解決したと思っているようですが、私もこのままでは心配なんです。」

学校の対応に十分納得していなくても、そのことを言うべきかどうか迷っている場合、知ろうとして聴くことにより初めて語られることも多いです。小さなすれ違いに気づき、知ろうとして聴くことで、大きなすれ違いを防ぐことができます。

理解する

子どもの状況や様子が良くないと保護者が不安になったり、子どもの登校を後押ししたりする力にも影響していることが分かった。そのため保護者は、学校に行きづらくなっている子どもに登校を促すことを躊躇しているのでは？と考えることができた。



担任：「言いづらいことを言ってくださったおかげで、どんな不安があるのか分かりました。」
「改めてもう一度お話を聴かせてもらう機会を作らせてもらえませんか？」
「顧問にも話を聞いてみます。」

- 思い切って話してくれたことに感謝の意を伝えます。
- 本人や保護者が抱えている不安をしつかりと聞き取ります。

詳しく聴いていくと、「“それくらいのことで”と思われるのでは？」と心配していたことなどが語られた。具体的な支援の方法について本人の気持ちを交えながら保護者と一緒に考える機会を持つことを提案することで、子どもにも保護者にも学校が安心して登校できる場所であることを伝えていくことができた。

【支援のポイント】保護者が学校の対応に納得をしていなかったり、学校の認識とは異なる理解をされたりしている時があります。それは本人・保護者の状況理解です。決して批判したり、性急に行き違いを正そうとせず、丁寧に話を聴き、話し合い、協力関係を持つ意識が大切です。

※いじめの疑いがある場合には、顧問や担任だけで抱え込まず、いじめ防止対策推進法に基づき、学校いじめ対策組織で対応することが必要です。

保護者の気持ちを理解していく

支援する

《事例4》学校に遠慮する保護者の気持ちを支援した事例

学校の状況把握

感情のコントロールが難しく、授業の中でみんなと同じ行動を取ることが難しかったり、授業を中断したりする行動を取ってしまう生徒について、保護者との懇談の際、学校での状況を伝えたところ、保護者はしきりに恐縮した様子で、「すみません」と謝るばかりだった。

保護者の様子

こちらと全く視線を合わせず、落ち着かない様子がみられた。

声のトーンや表情はどうでしたか？

ここで終わってしまうとすれ違いが起きます!!

知ろうとして聴く

担任：「お子さんがなぜ、授業中にそのようになってしまうのか、お子さんにとってどのようにしていくことが良いかを保護者の方と一緒に考えたいと思っていますのですが、どうでしょうか？」

保護者とともに考えたいと伝えることが、責めているのではない」というメッセージになります。

聴いて気持ちを知る

保護者：「これまでも、トラブルがある度に呼び出されていて、今回も『またか』と思いました。」
「自分の子育てが間違っていると言われていたようでつらいんです。」
「子どもが学校で楽しく過ごせるように協力してほしいけれど、あれこれお願いすることで私が文句を言っていると思われるのが怖くて言うことができなかったんです。」

保護者が安心すると、今まで言えずにいたつらさなどが語られることがあります。

理解する

保護者も子どものことで傷ついており、子どもの状況を聞かされる度に責められているような気持ちになっていた。そういったことが積み重なることで、どうすれば良いか分からなくなり、学校にも遠慮して、SOSを出せなくなっていると感じた。



担任：「そのような思いから学校にしてほしいことや保護者の方のお気持ちを伝えることに慎重になっていらっしゃるんですね。」
「お家ではどのようになさっているか、お聴かせいただけませんか？」
「大変な中でこれまでお子さんを支えてこられたんですね。」
「お子さんが楽しく授業に参加できる方法を一緒に考えましょう。」

- ・保護者の思いをくみ取ります。
- ・今できている点、課題となっている点について保護者と共有します。
- ・これまでの保護者のサポートを労います。

その後、保護者が家での様子を伝えてくれるようになり、本人が集団行動を取ることが難しかったり、授業を中断してしまうような行動を取ってしまいそうになったりした時の支援の方法を、保護者と一緒に考えることができるようになった。また、管理職をはじめ専門機関やSC、SSW等も含めて連携しながら、チームで支援を行っていくこととなった。

【支援のポイント】学校での様子を伝えるだけでは、責められたと感じる保護者もいます。「子どもを理解したい」という気持ちが伝わるように意識することや、保護者も子どもを支援するチームの一員として「協働していく」というイメージを持つようにしましょう。

※必要に応じて「個別の教育支援計画」を保護者の参画のもと作成したり、「個別の指導計画」を作成したりすることで、よりきめ細やかな支援にもつながります。